

シラ書 10章 12-18節

ヘブライ人への手紙 13章 1-8節

ルカによる福音書 14章 1、7-14節

朝夕が少しずつ秋らしくなってきました。再び残暑が厳しくなるかもしれませんが、夏の終わりが近づいているようです。

本日の旧約日課は、「シラ書」です。別名「集会の書」あるいは「ベン・シラの知恵」とも呼ばれています。聞きなれない文書名ですが、旧約続編に含まれます。旧約続編は、ローマ・カトリック教会と正教会では、正典に含まれますが、プロテスタント教会では、正典には入りません。プロテスタント教会の人々、ことに日本において、このシラ書を含む旧約続編は、1980年代に『新共同訳聖書』が刊行されてから、初めて読むという人も多かったと思います。わたしたち聖公会では、正典に準ずるものとして、以前から聖書日課にも含まれています。

その『新共同訳聖書』も新しい『聖書協会共同訳』が出版されて、「新」ではなくなりました。『聖書』の翻訳がそれほど必要かという議論もあります。しかし、わたしたち人間は、完全なものを作り上げることは困難であること、そして、翻訳という作業も、わたしたちが作り上げるものの一つであること、そして、つねにわたしたちは謙虚さを忘れてはならないこと、それらを考えると、『聖書』の翻訳改定は必要であると思います。たとえ新旧の『聖書』をいつも原語で読んだとしても、その都度新たな訳を試みているにほかなりません。

さて、旧約日課の「シラ書」は、いわゆる知恵文学という文書のグループに含まれます。法律や歴史あるいは詩文ではなく、格言的な知恵を語る文書です。旧約の中ではかなり後期に成立した文書に入ります。最後の方に書かれたということもあって、天地創造の初めからの出来事、与えられた律法に関する事柄、そしてイスラエルの歴史、それらを含めて、人間にとって何が大切か、それは知恵という存在である、そのことが全体を通して、示される文書です。

「シラ書」は、「**すべての知恵は、主から来る。主と共に永遠に存在する**」（シラ 1:1）という言葉から始まります。「シラ書」全体では、知恵という言葉は、139か所も出てくるのですが、本日の個所にはありません。しかし、本日の箇所が含まれる10章の最初に、「**知恵ある統治者は、その民を教育し、聡明な人の政治は、秩序あるものとなる**」（シラ 10:1）とあり、国家や様々な組織で指導・管理する立場の人々に対して、知恵を重んじることを語っています。本日の個所では、「**高慢の初めは、主から離れること、**

人の心がその造り主から離れることである。高慢の初めは、罪である。」(シラ 10:12-13a) という言葉で始まっています。旧約聖書の「箴言」にも「主を畏れることは知恵の初め。無知な者は知恵をも諭しをも侮る」(箴言 1:7) とある通り、『聖書(旧約)』の信仰では、主なる神様を畏れることが知恵の始まりであり、「シラ書」も同じです。主を怖れることから離れるとき、人間の傲慢が始まり、また罪が始まるのです。

「シラ書」は、そのことをより鮮明に示しているのですが、ことに、今日の箇所はいろいろな事例を例に挙げて述べています。そこでは、人間のすべての営み、すなわち、考えること、信じること、作ること、行動すること、ありとあらゆる営みに、主と共に永遠に存在する、知恵を重んじることの大切さが主張されています。

もちろん、知恵とは何かということが問いとなるかもしれません。また、知識と知恵とどちらが大切か、そんなことも問われるかもしれません。それらの問いも大切です。しかし、そのような問いを立てて、答えを見出し、その答えに満足すること、あるいは問い続けることに満足すること、それも傲慢かもしれません。「シラ書」の示すところから考えれば、主から離れては、知恵も知識も存在しないからです。そして、主を怖れるとき、なにが知恵であるかがはっきりすると主張していると思います。

本日の福音書は、「安息日のことだった。イエスは食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになったが、人々はイエスの様子をうかがっていた。」(ルカ 14:1) とあり、そのあと「イエスは、招待を受けた客が上席を選ぶ様子に気づいて、彼らにたとえを話された」と続いています。しかし、人々がイエス様の様子をうかがっていたのは、たとえを話すかどうかではなく、イエス様が水腫を患っている人を癒すかどうか、安息日違反をするかです。また、この「人々」は直訳すれば「彼ら」となり、だれであるかは明確ではないのですが、文脈上はファリサイ派の人々と考えられます。すなわち、イエス様の敵対者たちです。敵対者たちが、安息日違反をするかどうか様子をうかがっていたという物語です。

聖書日課では、2節から6節の水腫を患っている人についての部分が省略され、イエス様が人々に対して、宴会の事柄を題材にして教える部分のみが個所となっています。このような切り取りは、聖書学的に言えば、ことに物語として解釈する場合は、あまりよろしくないのですが、確かに、水腫の人についての話と、宴会についての教えは、つながりが悪いのも事実です。そして、「ルカによる福音書」としては、安息日違反を判断しようとするイエス様の敵対者たちの思い上がりや、宴会の事柄を通して批判しているとも言えますので、そのように受け取るのであれば、2節から6節の省略も可となるかと思えます。

さて、イエス様の教えですが、「招待を受けたら、むしろ末席に行って座りなさい。そうすると、あなたを招いた人が来て、『さあ、もっと上席に進んでください』と言うだろう。そのときは、同席の人みんなの前で面目を施すことになる。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」（ルカ 14:10～11）とあります。これらの言葉は、ここだけを取り出しますと、いわゆる処世術のように思えます。現代でも通用しそうです（あまり良い感じはしませんが）。しかし、イエス様がこう述べた根底にあるのは、つねに謙虚さを忘れてはならないという事柄だと思います。それは、どんなに人間世界で頂点を極めたとして、人間である限りは、主なる神様と比べようがない、だからこそ謙虚さを忘れてはならない。傲慢になってはならない。そう語っているのだと思います。ただし、人間の世界で基準もなく謙虚になりなさいと主張しているのではないと思います。「シラ書」が述べていたように、つねに主なる神様を意識するからこそ、真の謙虚さが生まれる。そのような謙虚さを持ちなさいと語っているのだと思います。これは『聖書』全体の教えです。さきほどの省略された部分、安息日についての事柄でいえば、人間が安息日に何を行うべきかを勝手に判断するのではなく、安息日を誰が、何のために与えたのか、そのことを忘れてはならないということが大切なのです。安息日は、破るか破らないかは、大切な事柄ではないということです。

このことが、宴会にだれを招くかというイエス様の教えに続きます。「宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ」（ルカ 14:13-14）。この言葉は、単なる処世術を超えています。何を目的に宴会を招くかはいろいろですが、一般的な観点からすれば、変わった開催方法であるからです。しかし、イエス様がここでこのように語っているのは、宴会を開く目的がそもそも異なるからです、

誰かを食事に招く、それだけでも結構労力、財力がいらしますが、宴会は、通常の食事を超える規模の大きな集まりです。個人の食事会を超えて、はるかに労力、財力がいらします。それは、イエス様の時代も現代も同じです。それがどうして可能になったのか、そこに自分の努力があったとしても、主なる神様が与えてくださった恵みが最初にある。わたしたちの礼拝における奉獻の言葉にもある通り、わたしたちがこの世界で受けたものは、神様からの頂ものであるからです（これも『聖書』「歴代誌上」29:14」の引用ですが）。食事に人を招くときも、そのことを忘れてはならないと語っているのです。

旧約聖書の「箴言」は、「主を畏れることは知恵の初め」で始まりました。そしてシラ書では、その知恵が「すべての知恵は、主から来る。主と共に永遠に存在する」という認識にまで深まり、知恵を知り、傲慢になってはならないことが、永遠に大切な事柄であると示されています。イエス様の教えで

も、そのことが共通して言われています。本日の福音書の最後に、イエス様は、「正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる」と語り、お返しすることのできない人を招いた謙虚さは、復活という永遠の命に結びつくと言っているからです。

本日の使徒書は、「ヘブライ人への手紙」です。本日で「ヘブライ人への手紙」は、最後となります。この手紙は、イエス様を大祭司ととらえ、『聖書（旧約）』に書かれている事柄（おもに律法と神殿祭儀）と、そこに書かれている大祭司とを超える存在であると語っています。そしてそれらの事柄を前提としたうえで、結論となるのが今日の部分です。「兄弟としていつも愛し合いなさい。旅人をもてなすことを忘れてはいけません。そうすることで、ある人たちは、気づかずに天使たちをもてなしました」（ヘブル 13：1-2）はその結論の最初ですが、「兄弟としていつも愛し合いなさい」は、新しい訳では、「兄弟愛をいつも持っていなさい」となっています。ここでは「兄弟愛（姉妹も含めます）」という信仰者同士が互いに重んじあうことを、日常的に行うことを求めています。「旅人をもてなすことを忘れてはいけません」とありますが、この「旅人をもてなすこと」は、「知らない人に親切にすること」という言葉であり、新しい訳の別訳では「旅人」が「見知らぬ人」となっています。そこでは逆に、日常的に交流のない人に対しても親切にすることを求めています。ことに後者は、天使をもてなすという、天的事柄にもつながると述べられています。これらの言葉の背景にあるのは、「シラ書」などと同じように、謙虚さにほかならないと思います。なぜそれをするのか、その根拠が、イエス様にあるからです。一人ひとりと出会い、その出会う人を大切にしようとしたイエス様の姿に、最も大切な事柄があるからです。そしてその小さな愛の業が、最終的に十字架という大きな愛の業につながり、その愛を示した方は、単なる歴史上の人物ではなく、「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることはない方」（ヘブル 13：8）だからです。

今日、世界で行われている、人間による悲しい出来事の一つひとつは、まさにこのイエス様が示して出さった、最初の小さな愛の業の欠如に他ならないと思います。それは、最初から謙虚さが無いということとも同じです。どんなに大きなことを目指しても、最初に愛の業がなければ、何も始まらない、どんなに努力を重ねたとしても、謙虚さがなければ、何を積み上げて崩れてしまう、『聖書』はわたしたちそのことを示し続けていると思います。その愛にわたしたち自身が満たされ、また世界に示し教会でありたいと思いません。